

過去の地震から知る、未来の備え ～被災地で生きていく子どもたち

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■家は全壊し、裏の空き地にわら小屋を作って寝泊まりした。食べるものなど苦労したが、家族と一緒にだったので寂しさを感じることはなかった。(宝飯郡形原町(蒲郡市形原町)市川弘治さん)

当時10歳だった。家がひしゃげちゃったもんで、家族が6畳1間のわら小屋を作ってくれた。

両親と兄2人に姉がいたからうまいこといった。食べ物も、おやじが魚を売ったり、兄がかぼちゃの買い出しに行ったりで、だいたいのはやってもらえた。一番下の子だから守ってもらえたかな。

ほいで、家族がばらばらになって、てんでてんで親せきのところに行った人は、えらかったじゃねえかな。そういう人もおったでなあ。



絵 藤田哲也

災害によって、住み慣れた土地を離れて疎開する子どももいれば、家族と一緒に被災地に残る子どもたちもいます。選択肢はさまざまですが、子どもたちを災害から守るためには、1)子どもの「安全」を確保するための現時点での最善策は何か、2)子どもに「安心」して生活してもらうにはどうすればよいのか、の2点を考える必要があります。そして、3)子どもは災害によって「こころとからだ」に大きなストレスを受けることを理解して、注意深く子どもを見守り続けることが重要です。

ストレスとは、人間のこころやからだに加えられる「圧力」だと考えられます。ストレスに対処するには「その人にストレスを与える引き金・原因(ストレスャー)と、ストレスによってその人がどういう状態になったか(ストレス反応)の2つのどちらかを、取り除いたり軽減したりすることはできないか」と考えます。しかし地震の場合のストレスャーは、地震の揺れそのもの、地震で人が亡くなった、家が壊れた、大切な物が失われた、水・ガスが出ない、まちがなかなか復旧・復興しないなど、取り返しがつかず、個人の努力ではどうしようもないことも多いのです。そこで「ストレス反応を低減」することが必要になります。阪神・淡路大震災から3ヶ月後、神戸大学医学部が被災地で子どものストレス反応を調査したところ、「よく眠れない」「イライラする」「小さな音や揺れに過剰に反応する」「家族・友だちと一緒にいないと不安になる」「急に地震の時のことや恐怖を思い出す」「頭痛・腹痛がする」「皮膚がかゆくなる」といった傾向が見られました。これらの症状に対して、子どもはうまくつきあう術をもちません。このような状態を見かけたら、専門家の指導を受けるようにしてください。

しかし、この調査で「困っている人への援助がしたい」という子どもも多くいることがわかりました。実際に、避難所でボランティアをしながら人と交わることで「非日常の中でたくましくなった」子どもたちも少なからずいました。短絡的に「子どもはとにかく疎開させる」のではなく、子どもたちの安全と安心に配慮して、子どもたち1人1人の状態・ようすを見守りながら対応することが大切です。